

# 「日本清堯銘」は徳川家康の日本の最高支配者としての宣言

宇田川 武久

## はじめに

これまで刀剣と銃砲史の世界で清堯は謎の多い人物とされてきた。なかでもその銘文が野田善清堯・清堯・日本清堯と複数存在することである。すでに野田善四郎清堯作の鉄砲の鉄砲については本会員の安田修氏が詳細な論考を寄せている（「野田清堯の鉄砲銘からみた武家の序列」『日本銃砲の歴史と技術』宇田川武久編 雄山閣 平成25年）。本発表では安田氏の論考に示唆をうけて清堯の謎の銘文の意味を明らかにしたい。

## 1 徳川ミュージアム所蔵の野田善四郎清堯作の鉄砲の概要

水戸の徳川ミュージアムには野田善四郎清堯作の以下の鉄砲五挺が所蔵されている。

No.	銘文) 口径 mm) 銃身長 cm) 全長 cm) (銘文装飾・機関部、その他
①	野田善清堯) 14) 122,7) 162,6) 筒元五三桐金象嵌 平カラクリ 町筒 角筒
②	清堯) 13,3) 91,3) 125,5) 上角に和歌、雲銀象嵌 平カラクリ 町筒 角筒
③	日本清堯) 13,2) 106,7) 141,3) 慶長18年9月吉日 刃鉄筒三重張 筒元三葉葵紋、花房鋤金象嵌「神君様御譲御鉄砲」 平カラクリ 角筒 (図1参照)
④	清堯) 14,2) 90,3) 125) 刃鉄筒二重張 筒元葵紋金象嵌「付表神」平カラクリ 角筒
⑤	日本清堯) 13,5) 106,6) 141,2) 慶長20年3月吉日 刃鉄筒重張 筒元三葉葵紋 花房櫛金象嵌 平カラクリ 角筒 (図1参照)

表1) 徳川ミュージアム所蔵の野田善四郎清堯の鉄砲

現存する鉄砲の多くは無銘が多いが、通常、銘文は鍛冶の居住国名、姓名、巻張という製作技法、ときに所有者の所属や姓名や年月日を切ることがある。ところが、前表一覧の鉄砲はひとりで野田善清堯・日本清堯・清堯と複数の銘文を切り、なおかつ居住国名がない。なかでも日本清堯銘の二挺は慶長十八年(1612)九月と同二十年三月の製作年月があり、銃身元口に三葉葵紋、花房に鋤・櫛の金象嵌があつて同一鉄砲鍛冶の作でありながら別格の印象をうける。

ちなみに『東照宮御譲品御入記』は③の鉄砲の由来を「神君御譲鋤之御筒一挺、六分丸長三尺五寸上並ニ金象眼にて御紋短冊鉄ニ鋤象眼有、銘刃鉄筒三重張 慶長十八年九月吉日 日本清堯(花押)」と記し、徳川家康が第十一男の水戸藩祖徳川頼房に譲った特別な品としている。

## 2 現存する野田善四郎清堯の鉄砲

野田善四郎清堯の鉄砲は水戸徳川家のほか、尾張徳川家、讃岐高松松平家、静岡の久能山東照宮、二代将軍徳川秀忠の神社・大社への奉納品などが現存するが、これも一覧で紹介したい。

所蔵) 銘文) 口径 mm) 銃身長 cm) 全長 cm) 備考 (銘文装飾 機関部
① 群馬貫前神社) 野田善清堯) 11) 40,2) 80,1) 上角に宝珠・瑞雲紋 奉納 上野国一宮大明神 慶長16年8月吉日 平カラクリ (地板の外にV字バネをつける) 角筒
② 徳川美術館) 日本清堯) 13) 117,3) 145,8) 慶長16年10月吉日 筒元三葉葵金象嵌 台師小田新助 ゼンマイ内カラクリ (地板内にゼンマイを仕込) 角筒
③ 香川県立ミュージアム) 日本清堯) 13) 112,7) 148) 慶長16年11月吉日 筒元三葉葵紋金象嵌 台師西村作右衛門 (高松松平家歴史資料) 平カラクリ 角筒 (図5参照)
④ 東京国立博物館) 日本清堯) 13) 113) 銃身のみ) 慶長17年6月吉日 角筒
⑤ 島根出雲大社) 野田善清堯) 14) 44,4) 66,7) 上角に宝珠・瑞雲紋 奉納雲州杵築御宝前 慶長17年10月吉日 一枚火蓋 平カラクリ 角筒
⑥ 島根日御碕神社) 野田善清堯) 12) 44) 66,2) 上角に宝珠・瑞雲紋 奉納出雲国日御碕靈社御宝前 慶長17年10月吉日 一枚火蓋 平カラクリ 角筒
⑦ 静岡久能山東照宮) 日本清堯) 13) 105,8) 140,5) 慶長17年11月吉日 筒元三葉葵金象嵌 三重張 ゼンマイ内カラクリ、角筒 (図4参照)
⑧ 大坂住吉大社) 野田善清堯) 13) 42,2) 64,5) 慶長18年月吉日 上角に宝珠・瑞雲紋 奉納摂津国住吉大明神 一枚火蓋 平カラクリ、角筒 (図2参照)
⑨ 静岡久能山東照宮) 日本清堯) 13) 89,2) 120,8) 慶長18年7月吉日 筒元三葉葵金象嵌 三重張 ゼンマイ内カラクリ、角筒 (図4参照)
⑩ 東京国立博物館) 日本清堯) 13) 102,1) 135,8) 慶長18年8月吉日 筒元三葉葵金象嵌 三重張 ゼンマイ内カラクリ 角筒
⑪ 香川県立ミュージアム) 清堯) 14) 96,2) 131) 筒元に「忠」金象嵌 台師西村作右衛門 製作年月日不明 (高松松平家歴史資料) 平カラクリ 角筒 (図6参照)

表2) 現存する野田善四郎清堯作の鉄炮

①⑤⑥⑧は神社・大社に奉納した鉄炮であるが、これらの銃身上角には慶長十六年・同十七年・同十八年とあり、銘は野田善清堯とある。⑥を所蔵する島根の<sup>ひのみさき</sup>日御碕神社には元和四年(1618)十一月二十六日付の野田善四郎清堯の書状があり、そこには「相国様(徳川秀忠)の仰せに依り日本六拾余州の大社へ鉄炮一挺宛進納する」(『日御碕神社文書』)とある。現存する大社・神社の鉄炮の銃身上角には「六拾余州之」と「野田善清堯(花押)」、その両脇に宝珠と瑞雲の模様、さらに奉納という文字が彫られており、鉄炮上角が文書の寄進状の様式になっている。

新宮高平の『駿河志料』(文久元・1861年)によると「慶長十六年に六拾四挺の筒を造り、六拾四州の大社に奉納し、出雲日御碕社へも奉り、彼社にて一挺龍神へ奉ることを頼んだ書翰が神家にあるという。当府当社に現存の炮に大日本六十四州云々、慶長拾六年、野田清堯の数字を彫る」との記

事がある。はたして六十四州の大社のすべてに奉納されたか定かではないが、一覧には上野国の貫前<sup>ぬきさき</sup>神社、大阪の住吉大社、出雲大社、日御碕神社に奉納鉄炮が現存しており、奉納計画のあったことは疑う余地はない。奉納時期は慶長末年とあるから二代将軍徳川秀忠が大坂の陣の勝利と徳川家の安寧を祈願して諸社に鉄炮を奉納する予定であり、それらの銘はいずれも「野田善清堯」と共通している。

つぎに③と⑩の高松松平家の鉄炮を説明したい。讃岐一国を支配した生駒氏が生駒騒動によって寛永十七年（1640）、出羽矢島一万石に改易され、二年後の寛永十九年に徳川御三家の水戸藩祖徳川頼房の子松平頼重が東讃岐一二万石の領主として高松城にはいった。このとき、三代将軍徳川家光は将軍家一族としての威儀を整えるために鉄炮などの品々を授けた。松平頼重の記録『英公外記』（綾野義賢）は拝領した鉄炮の由来をつぎのように伝えている。

年月知らず、権現様（徳川家康）御手筒 大猷院様（徳川家光）より守護筒と御極意御伝なされ、御拝領成され候、御筒一挺、但合印花房ニ金ニテ抱丁字上並二分金ニテ御紋付、小道具添、玉目三文目九分、筒尺三尺八寸、慶長十六年（1611）十一月吉<sup>しそ</sup> 宋粟鍛三重張、日本清堯の銘、檜台付、西村作右衛門。

すなわち、③は徳川家康愛用の鉄炮であり、三代将軍徳川家光が守護筒として松平頼重に授けたものであった（図5参照）。また記録は⑩の明細を「御筒一挺 但上並玉五分、先金ニテ忠之字付、小道具添、玉目四文目、筒尺三尺二寸、刃鉄重張、清堯之銘、台師西村作右衛門作」と伝え、これは「忠」字から徳川秀忠の愛用筒である（図6参照）。徳川家光は讃岐松平家を守護する意味を込めて徳川家康と父徳川秀忠愛用の鉄炮を授けたのである。

つぎの静岡久能山東照宮所蔵の⑦と⑨の鉄炮を説明したい。久能山東照宮所蔵の寛文四年（1664）十一月七日の「久能山道具之覚」に鉄炮二挺のつぎの記載がある。

式挺 内壺挺は、はがね、善四郎清堯作

壺挺は南蛮鉄 御鉄炮 但 三匁五分筒 台くわりん（花梨）、御金具 しぶいち（四分一）、

御玉袋七つ、御筒薬入式つ 御火縄式筋<sup>けんなわ</sup> 御間縄式筋 御鉄炮箱に入

この二挺は徳川家康の愛用筒であり、道具之覚は善四郎清堯作とする。しかし、原品の銘は一覧に明記した「日本清堯」であり、製作年月日は⑦が慶長十七年十一月吉日、⑨が慶長十八年七月吉日である（図4参照）。

②の鉄炮は尾張徳川家の伝世品で日本清堯の銘があり、製作年月日は慶長十六年十月吉日である。徳川家康の「駿府御分物帳」には清堯銘が二〇挺あり、同藩保有の清堯銘の鉄炮は群を抜いているが、これは尾張藩における稲富流砲術の流行と無関係ではない。

### 3 上田藩主藤井松平家の伝世品

一覧の鉄炮は現存する実物資料だが、信濃上田藩の「御手筒御貸御城附都而御鉄炮帳」（上田市立博物館所蔵）に日本清堯銘の鉄炮の記載がある。同史料は嘉永六（1853）年九月に上田藩が保有す

る総計七六五挺の鉄炮（御手筒八九挺・御貸筒二〇挺・所属記載なし五五六挺・御城附一〇〇挺）の調書である。

御鉄炮帳の作成時の藩主は松平忠周であるが、帳面には藤井松平氏の家紋「六角ノ内に撫子御紋銀象眼」「五七ノ桐御紋銀象眼」「前目当之前ニ五七ノ桐御紋銀象眼」の記述がある。寛永系図は藤井松平家の家紋について、もとは葵をもちいたが、のちに遠慮して葵の裏をかたどった酢漿草にしたと記し、桐紋の由来をつぎのように語っている。

永禄十一年（1568）九月十二日、徳川家康が織田信長から応援要請をうけて松平信一を派遣した。先手佐久間信盛の軍勢にくわわった松平信一は本丸を攻めて手柄を立てた。この褒美として松平信一は織田信長から桐紋のある<sup>かわ</sup>韋羽織を賜わり、それ以来、桐紋を使用しているという。

徳川家康が関東に入国すると、松平信一は下総の相馬郡布川五〇〇〇石に配置され、関ヶ原戦後は常陸土浦三万五〇〇〇石に移った。松平信一の家督は藤井松平の与次郎忠吉の長男信吉が継いだ、信吉の母は徳川家康の異父の妹であった。

松平信吉は大坂冬の陣（慶長十九・1614年）、大坂夏の陣（元和元・1615年）に従軍して五月七日の戦いで軍功を立てた。藤堂高虎が徳川家康の本陣に松平信吉の軍功を報告すると、自分の目に狂いはなかったと、徳川家康はたいそう喜んで賞賛したという。上田藩の御鉄炮帳の御手筒の記載のなかに<sup>しょうじょうひ</sup>猩々緋の袋に納められた三匁八分玉の鉄炮一挺があり、その明細は「長さ三尺、刃鉄重張、鉄物真鍮、台藤巻、銘日本清堯、慶長十九年十月吉日」とある。慶長十九年十月という製作年と日本清堯の銘から、この鉄炮は徳川家康の愛用筒にちがいない。大坂夏の陣における松平信吉の働きが期待どおりであったので徳川家康は愛用の鉄炮を手ずから授けたのである。

御鉄炮帳記載の鉄炮類のなかには松平信吉が徳川家康から拝領した鉄炮があったが、調書には銃身の先口が八角の鉄炮が多く、また銃身上角の筒元に（稲富）一夢の名と花押を象眼した鉄炮もみえる。松平信吉が鉄炮を拝領した事実は松平信吉が砲術を鍛練していたこと、さらにいえば拝領鉄炮が稲富流の仕様だから鍛練した砲術は稲富流になる。

松平信吉の日本清堯の例は文献史料での発見だが、徳川家康は松平信吉の軍功を賞して愛用の日本清堯銘の鉄炮をあたえたが、徳川一族の藤井松平家の守護の意味もあったにちがいない。

#### 4 野田善四郎清堯、徳川家康につかえる

鉄炮鍛冶野田善四郎清堯の人物を紹介しなければなるまい。三河に生まれ、江戸に出て鉄炮鍛冶<sup>あかがり</sup> 貳氏の弟子になって鉄炮の製作を習って野田善四郎と号し、後に駿河に移って刀剣の鍛練をはじめて作品に繁慶と切り、江戸へ移って鉄炮町に住んだという（『古今鍛冶備考』山田浅右衛門1975（昭和50）年）。

貳氏の先祖は日比惣八郎といい、はじめ伊賀に住んでいたが、織田信長の家臣滝川一益の仲介で徳川家康につかえた三河以来の職人であった。惣八郎は徳川家康の関東入国にしたがって鉄炮の御用を

多くつとめ、関ヶ原や大坂の陣では鉄炮の製作を指図して褒美に預かった。江戸の町が整備されて鉄炮町ができると住宅を拝領した。徳川家康は惣八郎の細工を御覧になって気に入って扶持米を加増し、鉄炮町の名主役につけた。

惣八郎は駿府にはいった徳川家康から鉄炮御用に召し出されたが、老年のため弟子で細工上手の野田善四郎を差上げたところ、段々に気に入られて御用をつとめて切米を頂いた。駿府では腰物を鍛えて繁慶と名乗り、その後、江戸の鉄炮町に住んだが、実子がなく跡は絶えた（「御鉄炮師厩惣八郎由緒書」『東京市史稿産業編第二巻』1937（昭和12）年）。

徳川家康は天正十八年（1590）八月に関東に入国し、関ヶ原の後、慶長八年二月に征夷大將軍となって江戸に幕府を開き、慶長十年四月に將軍職を世子秀忠に譲り、同十二年（1607）に駿河に移って全国政務を統括した。厩家の由緒書によれば、惣八郎の弟子で細工上手の野田善四郎清堯が徳川家康につかえたのは慶長十二年以後になる。

## 5 徳川家康と砲術師稲富一夢

慶長末年といえ、鉄炮が伝来して約半世紀、この間、各地に鉄炮術を教えることを生業とする砲術師が現われた。江戸中期の兵学者日夏繁高の『本朝武芸小伝』（正徳五・1715年）は戦国期の砲術諸流として津田監物の津田流、泊<sup>とまり</sup>兵部少輔藤原一火<sup>かずあつ</sup>の一火流、田付兵庫助源景澄の田付流、井上外記正継の井上流（外記流）、田布施源助忠宗の田布施流、稲富伊賀入道一夢の稲富流、西村丹後守忠次の西村流、藤井河内守介麴の一二齋流（南蛮流）、三木茂太夫の三木流をあげている。

このほか安見<sup>やすみ</sup>右近元勝の安見流、藤岡六左衛門長悦の藤岡流、片桐右近少輔の種子島流、米村某の米村流、岸和田某<sup>きののわだ</sup>の岸和田流なども流行した。諸流の鉄炮を観察すると、たとえば、銃口と銃身の形状が八角や円形であったり、銃尾<sup>とび</sup>が鳶の尾のように突き出た銃身であったり、銃床の握り部分にも大小厚薄があり、火縄挟みを起動させるカラクリの構造も一様ではない。

それでは前掲一覧の野田善四郎清堯作の鉄炮の仕様はどの流派に属するのかを探らなければなるまい。稲富流の祖稲富一夢は、もと丹後一色家の家臣であったが、主家没落後、豊臣秀吉の指図で細川家につかえながら加藤清正・井伊直政・浅野幸長・伊達政宗などの有力武将に砲術を指南した。『慶長見聞案紙』は徳川家康との関係を「慶長十六年二月九日、稲留一夢駿府において死去、これ当代無双の名人也、武勇の儀悪しく候て、細川越中守父子これを構えるといえども、鉄炮名人故、内府様密々御憐愍遊ばされ」と述べ、一夢が細川ガラシャ夫人の自刃を巡って主君細川氏と対立したとき、徳川家康が一夢の砲術の技量を惜しんだといい、その後、稲富一夢は駿府に住んで徳川家康に砲術を指南した。しがって徳川家康の愛用筒は稲富流の仕様であった。

徳川家康は武芸の達人であった。剣術は新当流の指南有馬満盛を相手に修行して免許皆伝を授けられ、天正二年（1574）十一月二十八日、兵法者の奥平急加斎から「相伝之太刀」の剣法伝授をうけ、さらに文禄三年（1594）五月三日には新陰流の柳生但馬入道宗厳に「兵法相伝書」を提出し、

馬術は大坪流を得意とした。

もちろん砲術にも強い関心があったことは、胝氏の由緒書が関東入国後、整備された江戸に鉄炮町ができ、同所に惣八郎が住宅を拝領すると、徳川家康が御出でになって鉄炮細工を御覧になったとの一文が語っている。また駿河にはいつて六年目の慶長十六年（1611）八月十三日の朝、徳川家康は浅間山に出かけて鉄炮を放った。距離二町の標的に五度ほど命中した。近侍の者は誰も命中させることはできなかった。午刻（真昼）、鳶が前殿の檜の上に留ったのをみて、鉄炮を放つと、三度とも命中し、二鳶が落され、一鳶は足を射切られて飛び去ったが、その距離は五〇間であった。ほかにも逸話があるが、これは確かな史料にみえる徳川家康の腕前である。

二代將軍の徳川秀忠も愛用の鉄炮を冥途の道ずれにするほどの鉄炮数寄者であり、稲富流に執心していた。一覧に掲げた鉄炮の仕様は神社・大社の奉納品をのぞくと、角筒で摺割目当、用心金や雨覆・火蓋、火縄挟を起動させるバネを地板の外にある平カラクリで、稲富流の特徴を備えている。ただし、一覧②の徳川美術館と⑦⑨の久能山東照宮の鉄炮は平カラクリではなくゼンマイ内カラクリを使用している（図3参照）。平カラクリは引金が軽い利点があるものの、徒落の恐れがあり、徳川家康はそれを嫌って、他流、たとえば、種子島流のカラクリを仕込んだと大胆に予想する。

### まとめ

以上、野田善四郎清堯銘の鉄炮について銃砲史・砲術史の視点から歴史的意義を論じてきたが、主張を三点にまとめておきたい。

① 野田善四郎清堯は銘に「日本清堯」「野田善清堯」「清堯」と切った。日本清堯銘の鉄炮には三葉葵の金象嵌が施され金具の細工も上等で徳川家康の愛用筒であった。「日本」は徳川家康の命をうけて野田善四郎清堯が銘を切った。徳川家康は慶長十四年四月に將軍職を秀忠に譲ったものの、駿府にあって大御所として絶大な権力を掌握していた日本の最高支配者であった。織田信長は「天下布武」を称したが、徳川家康は天下ではなく、新たに日本を冠したのである。

徳川家康は生前、抜群の軍功をあげた徳川一族の武将に、没後、徳川家康の愛用筒は親族関係にある尾張徳川家の祖義直、水戸徳川家祖頼房、さらに讃岐松平頼重に守護筒として譲られたのである。

② 一覧の清堯銘は三挺であるが、徳川家光が讃岐松平頼重に譲った一挺の筒に「忠」の文字があり、これは徳川秀忠の愛用筒である。この事実は大御所徳川家康以外の人物の持筒は、將軍といえども、ただ清堯と銘を切った。徳川家康が稲富一夢から稲富流を習うと、幕臣の多くが稲富流を修行し、野田善四郎清堯に鉄炮を注文した。清堯銘の鉄炮が多く存在し、なおかつ、慶長期の稲富流秘伝書が多く存在するのはこのためである。

③ 「野田善清堯」の銘は大社、神社の奉納品である。奉納筒には銃身上角に製作年月日が彫られており、仕様は稲富流ではなく、火蓋は一枚であり、南蛮筒の影響がみられるが、銃床も古風である。住吉大社所蔵の鉄炮を観察すると、前目当の摺割が浅く、金具にも使用の痕跡がなく、奉納用として

製作された可能性がある。奉納は製作年月日の予定であったが、慶長十九年と元和元年に大坂の両陣が勃発し、元和二年四月十七日には大御所徳川家康が病死するなど一大事が続き、とても奉納できる情勢になかった。その結果、元和四年の奉納になったのである。神への奉納に際して「清堯」、あるいは「日本清堯」の名乗りは僭越である。そこで徳川家御用鉄炮鍛冶としての姓名「野田善四郎」を切ったのである。

本発表では野田善四郎清堯の銘文の謎に検討をくわえて、「日本清堯」の銘文は徳川家康が日本の最高支配者としての宣言であり、なおかつ徳川家康の没後は徳川一族の守護筒として精神的支柱として大切に継承されてきたことなどをあきらかにした。

なお、本稿は2016年9月18日、東京九段の二松学舎大学において開催された徳川ミュージアム主催のシンポで発表した「日本清堯銘の鉄炮について」に手を加えての再録である。日本銃砲史学会の会員諸賢にも紹介したいと考えて投稿した。徳川ミュージアムのご支援と会員安田修氏の論文(前掲)に多大な示唆を受けており深謝したい。

図版一覧

三葉葵・榴の金象眼



日本  
清堯  
(花押)



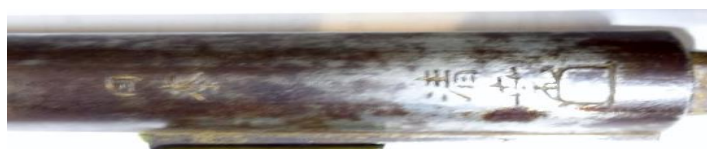
慶長  
廿年三月  
吉日



釘鉄筒三重張

⑤ 日本清堯銘の鉄炮

の部分 (口径13mm 全長141cm 銃身長106、6cm)



日本 清堯 (花押)



慶長 拾八年 九月 吉日

三葉葵・鋤の金象眼

(口径13、2mm 全長141、3cm

銃身長106、7cm)



③ 日本清堯銘の鉄炮の部分

刃鉄筒三重張

図1) 徳川ミュージアム所蔵の野田善四郎清堯の鉄炮



図2) 住吉大社奉納鉄炮 (大阪・住吉神社)



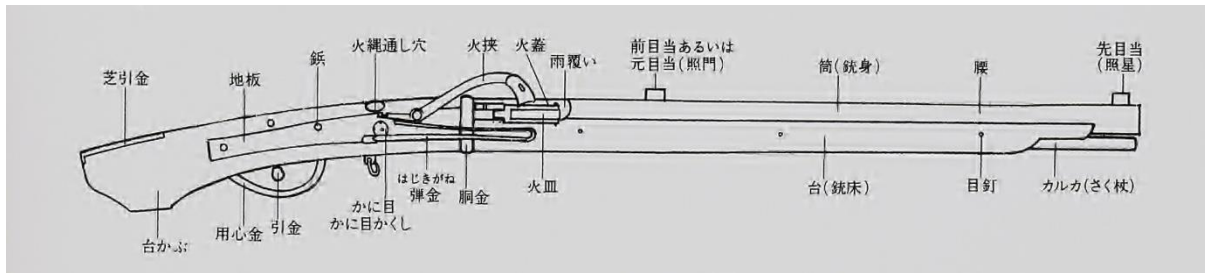


図3) 鉄炮名所とカラクリ二種 (左が平カラクリ、右がゼンマイ内カラクリ)

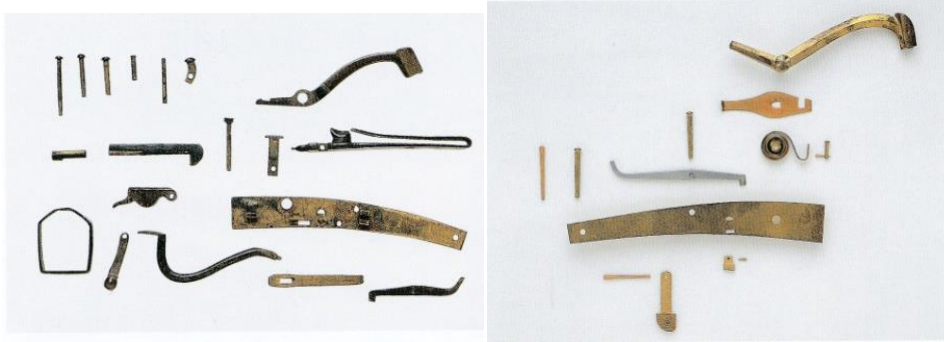


図4) 徳川家康愛用の鉄炮 (久能山東照宮所蔵・重文)



図5) 徳川家康愛用の鉄炮 (香川歴史博物館所蔵「高松松平家歴史資料」)



図6) 徳川秀忠愛用の鉄炮 (香川歴史博物館所蔵「高松松平家歴史資料」)

(注) 図3) 図4) 図5) 図6) は『歴史のなかの鉄炮伝来』(国立歴史民俗博物館2006年)の図録より転載。